

地域活性化という「遊び」

14

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュ村」から

山本晋也

祝 島に行ってきました。

なぜ突然祝島なのかと言いますと、この瀬戸内に浮かぶ人口400人ほどの小さい島で、飼料を全く買わず、島内で出る野菜の残渣や残飯のみを餌に、耕作放棄農地で放牧養豚をされている氏本さんという方がいらつしゃると聞き、移住8年目の春を迎えながら、奮闘努力の甲斐もなく、増え続ける獣害や耕作放棄



餌を集めるバケツ。中には丁寧に刻んでくれるおばあちゃんもいるそうです。

農地に頭を悩ます僕にはピーンときたからです。

思いついたら即行動と、いつも子供達には言っていますので、先方に連絡が取れるや否や「おい行くぞ!」と出発!のつもりが、今回は子供が属する地元野球チームの公式戦と重なってしまつて、チームも人数がギリギリなのでどうしても休むことができません。

スケジュールを調整しようにも、なかなかうまくいかず、家内とチームに属する三男が家に残るという案も出ましたが、限界集落活性化を家族で取り組んでいる我が家として、は、これから取り組んでみようということを全員が見ておくということには外せず、最終的に球場で待機し試

限界集落活性化に取り組む我が家が訪ねた瀬戸内の島で見つけたヒント

合が終わると同時に車に飛び乗って出発となりました。

島に到着して、農場主の氏本さん

路地を宿へ向かって歩いてみると、ところどころにバケツが置いてあります。

このバケツに島の人たちが毎日残飯を持ってきてくれるそうで、僕らが見学しているときにも、おばあちゃんがキャベツの葉っぱやなんかを持ってきていました。

島の人はバケツに入れていいものと悪いものをしっかり理解していて、後で分別する必要はなく、これらに島で出る米ぬかを混ぜて一晚発酵させたあと豚に与えるそうです。ただ観光客が増えるシーズンは、他

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを運営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュ村副村長。

のゴミを入れてしまう場合もあるのが注意が必要とのことでした。

この残飯と米ぬかで豚30頭ほどの飼料を賄っているとのこと。

氏本さんは餌の量から島内で無理なく飼える頭数を決められているそうです。

宿に荷物を置き、海と山の境にある耕作放棄農地の放牧場へ

着きましたが、ソーラー式の電気柵で囲われているだけで豚舎がありません。

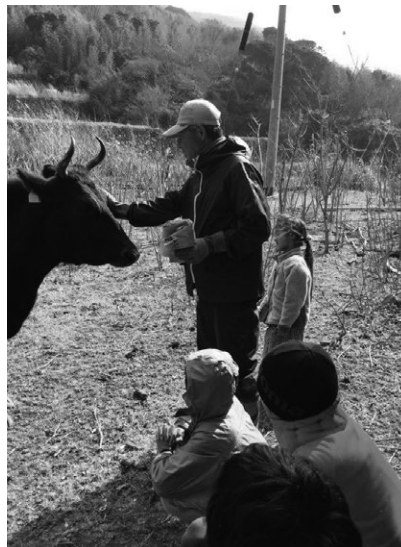
ちよつとした屋根のようなものはありませんでしたが、豚はあまり利用しないとのこと。

普段は山裾の木陰で寝るそうです。祝島は台風の通り道と聞いていたため、台風ときはどうするのか聞いてみますと、台風が来る4、5

日前から木の枝なんかを集めて山裾の安全なところに自分たちでシェルターを作るそうです。



とても慣れているのと匂いがないのに驚きました。



豚が食べない餌や耕作放棄農地の草を食べてもらうために牛もいます。草しか食べていないので糞が固形で臭くないのです。



説明をする氏本さんの後ろで糞を投げて遊ぶバカに氏本さんも苦笑い。氏本さんも昔やってたそうです。



氏本さんは自宅の蔵を改装し食堂もされています。土壁にはご先祖さんが土を塗ったときの手形がまだ残っていて感動しました。

見 学を終えた夜、食事をしながら氏本さんと色々お話しして、豚に生き方を選択する自由を与えるという考えが、僕の子育てに対する考え方によく似ている旨お伝えすると

「そういう子育てができていいるなら豚もきつと飼えますよ」「どうりであなたとところの子供もうちの豚に負けないくらい元気がいいね」と言っていただき、なんだか僕らにもできそうな気がしてきました。

放牧養豚で一本を目指すのではなく今やっている農業に一部放牧養豚を

水飲み場もともと田んぼだったところなので、ほうっておけば水のありそうところを自分たちで掘って飲むというのには驚きました。

世話としては餌やりと人工授精と子豚の歯切りくらいで、できるだけ豚に生き方を選択してもらって、余計なことはしない方がいいというのが氏本さんの考え。

餌の奪い合いで生育にばらつきがあっても、出荷の際に強くて大きい豚が一番に出荷用の檻に入るの、自然と大きいものから出荷できるというのも面白い話でした。

何より自由を与えられた豚はストレスがほとんどないようで、今までに飼っている豚が病気にかったことはないそうです。

小 さいことを逆手にとって、そこで精一杯のことができることから始める、というところは僕も常々意識していたところですが、大規模経営、小規模経営色々ありますが、それぞれの良さを十分生かさないと成り立たないという点では共通していると思います。

最も印象に残ったのは「豚も氏本さんもとても楽しそう」ということでした。

やっぱり地域活性化のキーは、大変な仕事をやって楽しい遊びに変えていくことだと思います。

取り入れ食育や観光等に複合的に生かすことで、問題解決の糸口を見つけたいと考えている僕らには良いヒントになりました。

餌代が全くかからないことと、銀座や京都のレストランに一頭丸ごと卸すことで、十分利益が確保できるということです。

生育期間が14ヶ月以上と長いことや出荷頭数が少ないという希少性、餌の100パーセント自給というストーリー、一頭買いの場合内臓などの希少部位が利用できるなど、腕利きのシェフからも高い評価を得ているとのこと。

編集部注：祝島は山口県に属し、面積約8㎢。戦後の最盛期には約5000人が住んでいた。